

5人の絆

③

タイガース完全復活

ステージから教壇へ、そしてまたステージへ……。ドラムスの瞳みのるの半生は、あまりにもドラマチックだ。

1971年、タイガース解散。「僕たちはライブバンドだっていう誇りがあった」。が、周囲からは、アイドル扱いされるこ

瞳みのる



清水敏明撮影

音楽への思い よみがえる

とが多かった。「こんなところで、やりたいこともできないんじゃない、しょうがない」。ピーの愛称で親しまれた瞳は、仲間との連絡を一切絶った。

学業を再開、中国文学を専攻して大学院まで進み、やがて高校の漢文、中国語の教師になった。「子育てもあったし、自分たちの学校に合った教科書を作らなくちゃいけなかった。余裕

がなかった」。自分の子供たちにもタイガースの一員だったことを明かさなかった。

変化が訪れたのは、解散から40年近くを経た2008年。すでに還暦を超え、今後の人生を

考えていた。同年、テレビに出演した沢田研二たちは瞳に再会を呼びかける曲「ロング・グッバイ」を披露。元マネジャーは学校まで訪ねてくれた。心は動き始めていた。

その年12月、かつての仲間たちと東京・渋谷で再会した。杯を交わすうち、いつしか昔の自

分たちに戻っているのに気がついた。席上、タイガースをまたやってもいいのでは、という話が出た。「これは、ひょっとしたら」と、その時思った。

仕事が一段落したとして、定年を待たず学校を離れた。食に関心があり、「上海でおでん屋をやろう」と考えたこともあったが、「自分に向いているもの、やってきたことは何かと考えると、最初にやった音楽と、大学に入ってから文学」。音楽への思いが復活した。

沢田は瞳について、「あの人

ね、努力家やから、ずっと楽屋でも練習ですよ。うるさいから、楽屋一緒にせんといてほしいってみんなに言われる」と語る。

11年9月、沢田のコンサートに、瞳はゲスト出演した。ステージに行くと、会場の空気と緊張で、「ぞくぞくとした。ああ、こういう世界だったんだって」。執筆活動もしているが、やはり音楽は格別という。「音楽って時間も空間も超える。人の心の中にずばっと入っていける」

◇ 次回は15日、森本太郎の予定。

文化

Culture

エンタ

